

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書

2023 年 11月 8 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 工学研究科

職 名 准教授

氏 名 松尾 二郎

助成の種類	令和5年度・国際会議開催助成		
国際会議名	第26回イオンビーム分析(IBA)国際会議(IBA 2023)		
開催期間	2023年10月7日～2023年10月13日		
開催場所	富山国際会議場(富山県富山市大手町)		
参加者	総数 259名	内訳 日本110名、中国12名、スウェーデン12名、フランス9名、南アフリカ9名、カナダ8名、ドイツ8名、ポーランド6名、イギリス6名、アメリカ6名、ベルギー5名、フィンランド5名、スロベニア5名など35ヶ国	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	事業に要した経費総額	31,324,073 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 参加費、企業協賛、助成金(鹿島学術振興財団、徳山科学技術振興財団、スズキ財団、富山県、富山市、観光庁)	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額(円)	財団助成充当額(円)
	旅費交通費/参加費支援	7,491,805	1,000,000
	会場・会議費	9,114,574	
	印刷製本費	1,245,200	
	通信運搬費	1,357,064	
	謝金	1,042,400	
消耗品費	1,713,993		
その他	1,894,946		
レセプション・エクスクーション費	7,464,091		
合計	31,324,073	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 本財団の助成金は国際学会を主催する機会の多い京都大学の教員にとっても有用なものであった。今後もこの事業を継続して運用して欲しい。		

## 成果の概要／松尾二郎

2023年10月7日～10月13日の日程で、富山県富山市の富山国際会議場にて第26回イオンビーム分析(IBA)国際会議(IBA2023)を開催した。IBA国際会議は、1973年に米国のニューヨークにて第1回が開催され、2年おきに世界各国で持ち回りで開催されている。半世紀の歴史を持つ伝統の学会であり、当該分野で最も権威ある国際学会として広く認知されている。本会議の目的は、イオンビーム分析法に関する技術課題の議論、応用分野の拡大、若手技術者の育成等である。特別講演・口頭発表・ポスター発表など様々な発表・議論の場で、基礎研究から最新の産業応用まで様々な視点から活発な議論がなされるだけでなく、国際交流や若手研究者の育成等にも積極的に取り組んでいる。

今回のIBA国際会議は、イオンビーム分析の一種である荷電粒子励起X線発光(PIXE)国際会議(PIXE2023)と合同開催され、35ヶ国から259人の研究者が集い、大変盛況な会議となった。参加者の主な内訳は、日本国内から110名、中国から12名、スウェーデンから12名、フランスから9名、南アフリカから9名、カナダから8名、ドイツから8名、ポーランドから6名、イギリスから6名、アメリカから6名などであった。10月7日～10月8日の日程で実施された若手育成のためのスクールでは、6名の国内外の講師から様々なイオンビーム分析法の基礎や分析に用いる加速器についての講演が行われ、55名の学生や若手研究者らが参加した。スクール後の意見交換会では講師・学生・若手研究者らが集い、お互いの交流を深めた。

10月8日には、Thomas Calligaro教授によるイオンビームイメージング技術の美術品や考古学的遺物への応用についての基調講演が行われた。その後、IBA国際会議が今回で50周年を迎えることから、50周年記念特別講演が実施され、第1回会議からのIBA国際会議の歴史やイオンビーム分析の過去と未来について多くの写真やビデオを交えて紹介があった。10月9日にはAndrew Bettiol教授による量子アプリケーションに応用可能な高エネルギーイオン注入によるカラーセンター生成についての基調講演、10月11日には坂本 尚義教授による小惑星サンプルリターンミッション「はやぶさ2」による帰還サンプルの分析についての基調講演が行われ、多くの参加者にとって大変興味深い講演内容であった。この他、19件の招待講演、75件の口頭発表、146件のポスター発表が行われた。本会議は4年ぶりの対面開催であったこともあり、いずれの講演でも多くの質疑応答がなされ、コーヒブレイクやランチタイムにおいても活発な議論が行われた。

本会議の参加者支援としては、招待講演者の参加費免除に加えて、若手賞(海外4名、国内3名)や優秀発表賞(11名)、及び学生参加費支援(42名)など、多くの若者向けの賞や金銭的支援枠を設け、学生・若手研究者支援に力をいれた。これにより66名の学生参加者が本会議に集まるに至り、スクールと合わせて若手育成に大きく貢献できたと考えられる。エクスカージョンでは、観光庁のポストコロナに向けた国際会議誘致競争力向上事業の補助を受け、一般的な観光バスによるツアーではなく、5つのコースに分かれて徒歩や路面電車を利用して富山市内の名所(富山城址公園、富山ガラス美術館等)を訪問するとともに、さまざまな体験(茶道、和菓子作り、

丸薬作り、利き酒)を通じて、参加者に現地の文化・歴史に触れていただく機会を作り、研究者同士の交流を深めるだけでなく、日本の良さを多くの外国人参加者に理解してもらうイベントとなるように実施した。また、バンケットも観光庁の補助を受け、商店街のアーケード内にあるイベントスペース(グランドプラザ)においてビュッフェスタイルのバンケットを開催し、参加者に富山地元料理を含むさまざまな地産料理や、富山の地酒などを楽しんで頂いた。バンケットの余興には富山県の伝統芸能である「おわら演舞」を披露し、参加者は鑑賞するのみならず希望に応じて演者とともにおわら演舞を体験して頂いた。

このように本会議はイオンビーム分析の発展と研究者同士の国際交流の場を提供し、さらには若手支援策を多く取り入れることにより、これまでのIBA国際会議のなかでも多くの参加者が対面で集まり、イオンビーム分析法に関する技術課題の議論、応用分野の拡大、若手技術者の育成という会議の目的を十分に果たすものとなった。また、地元に着した形式のエクスカージョン及びバンケットを開催したことにより、外国人に日本の文化・歴史の魅力を十分に発信し、今後の日本における国際会議誘致力の向上に貢献できたと考える。